
ピエロ

楚良ノ鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピエロ

【Nコード】

N6504A

【作者名】

楚良ノ鷗

【あらすじ】

1人の男ペルサ・エフエティーのところを凄まじい霊圧を放つピエロが現れた。その力に目がくらんだペルサはピエロとある契約をする。

く序章くペルサ前編

大風にみまわれて前がよく見えなかった時、奴は現れた。木枯らしのせいで目がくらむ。

身長は低く、小柄だ。手には糸で繋がった手毬を持って、宙を浮かせてるようにになっているが

風のせいでお見通しだ。

だが

身体は宙を浮いているないか。儂は少

し動揺した。

霊圧が身体の動きを鈍らしていく。動揺した瞬間、隙を衝かれたのだ。

白と赤ベースの人形が、波紋をたてながら宙をてくてく歩く。動けない儂の前で立ち止まった。

「おやおや、この位の霊圧で動けなくなる様な人間でしたか、これは失礼。」

人形は、困った顔をして手毬を放した。ガラスが割れたかのように一瞬でさつきまでの霊圧が消えた。

霊圧はなくなり、身体は動くようになったが口はなにも語るうとはしない。いや、語れないのだ。

前から巨大な殺気と、憎しみ、悲しみが襲ってくるからである。

人形がカタカタと小刻みに震える。表情などないはずの人形が大きく笑った。

「あなたにないのは勇氣ですか？言う気ですか？それとも

力ですか？」

口が張り裂けそうなくらい、ニヤつく。まるで、死を運ぶピエロのようじ。

拡声器を通して喋る様な声が家中に響き渡る。朝っぱらから、人形が騒いでいるのだ。

毎度の事なので、いつも無視……したいところだがそれが今までに実行できていたら、嬉しい。

前に家を丸焼きにしたし、科学の実験みたいな料理はするわ、本当に死を運ぶピエロなんだから。

「僕はいつお主に家事をしると命じた!？」

結局出たくなかったベツトから勢いよく飛び出し、毎度毎度の台詞で人形を叱る。

全く、あやつに家事などやらせたらこっちの命がいくつあっても足りん。余計な事ばかりしおって。

「ですから、私は貴方様との契約がきれるまで面倒を見なければ……。」

人形は一気に言葉をなくした。痛みと反動に耐えきれなかったのだろう。

「痛いですよ、それでも兵を募うあの部隊の長ですか？」

流石人形、馬鹿に冷静だな。だが僕は伊達にあの部隊の長を務めた人間ではない。

誇りと情熱をぶつけていた、が

「お主が力を求めていた僕の前に現れるからいけなかったのだろう……。」

「力を受け取った貴方様がいけないのでしょうか!！」

表情や、感情を持たない人形が時々怖くなる。怒っても表情は変わらず、ただ単に声が大きくなるだけ。

戦闘能力は不明。戦ったことも、喧嘩したこともない。本当に怒らしたら、デスサイズ大鎌でも

出てくるのかな。それとも、異次元や時空に放り投げられるとか。目の前で浮いている人形に少し疑問を持った。

「今更聞くが、どうやってお主は浮いておるのだ?ここは無重力地帯ではないぞ。」

でも髪の毛はパーマだから重力に反してるわけではないのか。

「天うらえから糸で吊る下げてもらってるんですよ。」

冗談なのか、本当なのか分からない発言をしてくると、なんて言
つて良いか分からなくなるから

止めてほしいものだ。リアクションもとれんし。

「では儂が吊る下げてくれてる糸を切つてやるうか？」

どうせ銀とか合金で出来てて切れないんだろうけど、試しにやっ
てみよう。

儂は近くにあつた鋏はさみを使い、糸を切ろうとした。

少々強めに押して、切りかかった。

パチン。

園芸用鋏で花の茎を気持ち良く切つた様な音がした。自分でもすこ
く驚いている。

人形を吊る下げている糸が、いとも簡単に切れてしまったのだ。

予定外のこと汗が額から頬へ流れる。糸が切れた「人形が歩く」

怪しい!?

「嗚呼、知りませんよ。私は歩いても良かったのですが貴方様が、
浮いてた方が言いとおっしゃってたから。」

浮いてたら、これは腹話術の人形なんですよ。とか言い訳できたの
に……。

「これからまた天に行つて、糸で吊る下げてもらえぬか？」

天に行つて、そのまま帰つてこなくても良いが。と言いたかったが、
流石に言えなかった。

「無理ですよ。100年に一度しか吊る下げの儀式はしませんから。」

「つ、つ、吊る下げの儀式?!なんじゃそれは。天から地まで吊る下
げるのに、儀式を行わなければならぬのか。」

天も良く分からないことが、好きなんじゃな。儂らと同じだ。一つ
違つのは 力 か。

……誰か、儂の家にいる「人形一匹」頂いてください。

く序章くペルサ前編（後書き）

ピエロく序章くペルサ前編を読んでくださって、ありがとうございます。
ます。

まだまだ続く予定です。ぜひそちらも更新したら、読んでいた
だけると嬉しいです。

第二章　ペルサ後編

力　　その差は、縮めることができる力と、縮めることのできない力がある。

特に、儂とあやつの差は縮めることのできない力だ。儂は実際にあやつを拝見した事はないが

あやつのは、強大な破壊の力だ。あの、気を司れるほどの者だから。しかも、あやつはただ者ではない。

いや、その前に「人間ではなかった」な。あやつは死を運ぶ

ピエロだ。

「あなたにないのは勇気ですか？言う気ですか？それとも　力ですか？」という台詞を巧みに操り

人間に宿る。そう、あやつが人間に宿る理由がやつと分かったのだが……もう遅い。

「ゴホッ！ゴホッ！………！？」

咳をした後、口を塞いだ手を見ると深紅の血が付いていた。

血の匂いが香ったか、すぐに「人形」が来た。しかも、儂の姿を見て一瞬クスツと笑った。

顔を真っ青にして、手に付いた血を見ていた儂に笑ったのは、よく分からなかった。それにしても、酷い奴だ。

今「人形」を見て思ったが前に切ってしまった、あの簡単に切れる糸がまた付いていて、吊る下がってるじゃないか。

「たたく、100年に一回など嘘をつきおって……。冗談だと思っていたがな。」

「大丈夫ですか？私は貴方様に死なれては困るのですから、身体にはお気をつけてくださいね。」

あやつ、儂が口から血を吐いてもなにも動揺せん。さすが感情無き、ポーカーフェイスめ。

「人形」として人間の心配くらいしろ。家の家事など、しなくて良い

から。これでも、契約した主だというのに。

「何故だ？ 儂はお主と繋がっておる。儂が身体を壊せば、お主の身体も平気ではなかるう。」

おかしい、何故あやつは平気な顔をしている？ 何も起きない？ 儂とあやつは

「!？」

感情無きはずの「人形」がクスクスと笑い声をたてる。まさか、まさかあやつは……。

「儂の「身体と心を吸い取ってる」というのか?! ……お主つよくも……。」

身体感覚が、少しずつ無くなってきた。「人形」のせいだ。しかも、異様にむしゃくしゃする。

感情ナド要ラナイ、欲シイノハ、「力」

ダケダ

頭のなかで、その台詞だけが出てくる。儂は……そこまでして力など望んでいない! ならば、力など要らぬ!!

「嘘をお付になるのは、おやめになってください。欲しいのではありません? 「力」が。」

「嘘など、儂は一度もついたことなど無いわ。さっさと、元に戻せ「人形」! !!」

「人形」などに、儂の身体と心を盗られてたまるか。「人間は人間」決して「人形は人間になれない」

一生「人形」には理解できん事だな。人間の感情を手に入れたとしても……。「人形は人形」しよせんそんなものだ。

「うるさい! 貴方様に「人形」の気持ちなど、分かるものか! !」
くそ、もつろくに声も出せん。「人形の気持ち」か。考えてもみなかったな……やはり何にでも気持ちはあるのか。

口から吐いた血は、留まるところを知らなかった。床が朱に染まっ

た。

出血多量で死ぬなど、僕の死に方ではない。絶対に「人形」の首根っこを引つ張つてやる。たとえ事情があろうとも。

「契約者ペルサ・エフェティー。我が感情となることを望んだ者。我が契約の元、我が感情となれ　リリース！」

「人形」がそう叫んだ瞬間、僕の足元の床が宝石のような怪しい光りで光った。そして、その光りにより魔法陣が綺麗に床に刻みこまれた。

いや、これは光っているから光りに見えるが

血

だ。僕の血……！？まずい、やられた。

多分この魔法を使うには、契約者（生贄）の大量な血が必要なのだろう。だから僕を、放置していた。まさか

そんな容易い罠に引つ掛かってしまうなど、この僕も落ちぶれたものよ。死ぬのか……。

「死にはしませんよ、ただ単に私の一部となるだけです？ご不満ですか。」

ああ、不満だよ。あやつの一部となるなら、死んだ方がマ……

心が読める「人形」は僕が「死んだ方がマシ」と考えかけた前に、僕の手を無惨に踏んだ。タバコの火を消すように

靴で、擦りつける。

「生命いのちのある貴方様たちが、生命を容易く捨てようとするとはどんなことですか！？私たちは、生命が

欲しくて欲しくてたまらなかつた！だから……今回、貴方様に契約者となっていたいただきました。」

無感情でポーカーフェイスの「人形」にだんだん怒りの色が見えてきた。もう「人間」同様とも言える。

血が止まらないからかもしれないが、「人形」が生命を持って「人間」になれる気がしてきた。僕も、ついにここまで考えが鈍ったか。

「お……主と僕……いれかわった……な。お主が、感情を手に入れ……僕が力を手に入れた……だが、同時に……」

1つなくしてしまった……。特に僕は……感情をなくし、「人間」とは……言えなくなってしまった……。な。」

僕は、最期の最後身体全体の力を振り絞って、言いたかったことを言えた。そう。

なんでも手に入れたいものを手に入れた瞬間、同時になにか1つ失ってしまう。いわゆる、『交換』だ。

「人間」はそれを忘れていた。全て掴むことはできない、世界はそういう風にできている。

「……貴方様、お変わりになられましたね。私、貴方様より分かっていなかったようです。無礼をお許してください。」

「人形」は「人間」に向かい、うつむいたまま喋った。まさに、家来が王に従えるようにひざまずいた。

「だったら……1つ頼みがある……。」

「なんででしょうか？貴方様。」

ペルサ・エフェティーは最期に、一生見せなかった笑顔をして、大好きだったくご機嫌ようぐが花言葉のシオンの花と一緒に安らかに眠った。

「その頼み、承りました貴方……いえ、ペルサ・エフェティー様。」

「人形」は床に透明な雫を1粒落として、ペルサ

邸をあとにした。旅に出るために

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6504a/>

ピエロ

2010年10月29日05時10分発行